

国際フォーラム

国際フォーラム

粒成長国際会議印象記

松 浦 清 隆

北海道大学工学部

1. は じ め に

1991 年 6 月 18～21 日にイタリアはローマ郊外にある材料開発センターにおいて、多結晶材料中の粒成長に関する国際会議が開かれた。筆者はこの会議で講演発表する機会を得たので、その印象について報告する。

2. 語学力か度胸か？

空港に着き入国審査を終えて、両替を済ませた。さて荷物を受け取ろうとベルトコンベアの上を流れるバッグの列を眺めているうち、とうとう最後の荷物がその持ち主に引き取られて、筆者は自分の荷物が無いことを知った。『イタリアには泥棒が多いので要注意』と書かれたガイドブックの文字が頭の中をぐるぐると駆け巡った。

バゲッジ・サービスと書かれたカウンターに行ってもその旨を伝えた。係の青年は、荷物の番号をもとにいろいろと調べて、それがロンドンの空港にあると言った。結局、荷物はその夜の 1 時過ぎにホテルに届けられた。到着早々、かなり真剣な英会話のレッスンができ、適度を著しく超える刺激を味わうことができた。

次の朝、ジブシーの子供たちに取り囲まれて財布を盗まれそうになったり、私服の警察官と自称する大男に路地裏で“取調べ”られてパスポートや財布を取り上げられそうになったり、いろいろと嬉しくない目にあった。そのため、ローマの第一印象は少々芳しくないものとなったが、著者にとっては少なからず度胸をつける訓練になったように思われた。

これらの訓練の成果は、その後約 3 週間のヨーロッパ旅行中幾多の場面で十分に活かされたように思う。例えば、ある町では正規の 2～3 倍のタクシー料金を要求された。このようなとき、照れたりもの怖じしたりせず、相手に伝わるまで話し自分に理解できるまで聞き返すことができた。そうでもしないと生きて日本に帰れないような不安を感じた。

サバイバルに必要なのは優れた英語力でないことは、自分の話した英語がほとんど中学生の英文法の範囲を越えていなかったことから明白であるように思われた。

3. 大学と企業

国際会議では招待講演と基調講演 20、一般講演 68、ポスター 52 の合計 140 の発表が行われた。参加国は計

30 で、発表数の多い順に列挙すると、合衆国 25、イタリア 21、ソ連 15、日本 14、ドイツ 11、連合王国 8、フランス 5 と続く。開催国からの発表数が多かったのは当然のこととして、その他の国々はおおむねそれらの国の工業力や技術力のある程度反映したものと思われた。

発表者の所属を大学と企業（研究所を含む）に分類すると、全体では大学が約 71%と多かった。これに対して、日本からの発表では大学からの発表が約 57%と、外国と比べて明らかに少なかった。

このたびの会議を通じて知り合った何人かの外国人たちは、みんな異口同音に日本の技術の高さを讃え、日本からの発表（“特に企業の”と彼らは付け加えた。）のレベルの高さを誉め上げた。

街を歩くと、自動車、電気製品、カメラ等々、非常に多くの日本製品を目にした。これらを見るたび、始め筆者はいささかの誇りを感じた。しかしそのすぐ後で、わが国の先人たちが戦後のわずか数十年でわが国の力をこれまでに育て上げるに要した努力と苦労を思い、さらにその過程において大学の果たし得た役割はいかほどのものであったろうかと考えるに至った。

会議後、筆者はノルウェー工科大学のフンデリー教授を訪ね、彼の率いる応用物理研究所で簡単な講演をする機会を持った。上記研究所は、SINTEF（ノルウェー語で科学と工業のための基礎研究所という言葉の略語）に属している。SINTEF は工業技術に直接結びつくような研究を行う目的で金属工学科とは別に設立され、彼はその主任教授である。

筆者の訪問時にちょうど、サマー・スクールと呼ばれるセミナーが行われていた。このセミナーでは欧米各国の大学や企業からの著名人たちが講師として招かれ、その期間は 1 週間ということであった。

上記工科大学は、トロンハイムという人口十数万人余りの小さな都市にある。このような小さな町の 1 工科大学が国際的なセミナーを主催していることに、筆者は大きな驚きを感じた。さらに強く印象づけられたことは、第一に欧米諸国は一つになって彼らの発展に取り組んでいるように思われたこと、第二に彼らの国々では産学は一体であり、大学での研究成果が直接産業界に応用され、一方現場の技術が大学で講義されていることであった。この現状に触れて、ある種の凄みや勢いが筆者には感じられた。

4. 終 わ り に

このたびの欧州旅行に際して、第 15 回日向方斉学術振興交付金を受けたことを付記します。